

賀茂真淵と本居宣長の学問

原 雅子

キーワード 国学、古事記伝、賀茂真淵、本居宣長、栗田土磨

序

新資料の現出は研究にとって潤いの一滴となり、大河へと注ぐ。事実が新たに加わることによって、研究は資料によって補完されて行き、紡がれていくものである。その都度都度の、「一滴一凍」という収斂していく在りようを表現する言葉もまた、琴線に触れる。その時々のが大事となる。そして、遙かな境地とは言え、禅語「百尺竿頭、更に一步進めよ」の言葉が頭をよぎる。

本居宣長研究の進捗は本居宣長記念館の本居宣長資料の宝の蒐蔵、本居宣長全集の充実を支えられて、国学研究では重きをなしている。鈴屋学会からの要請として、本居宣長の師である賀茂真淵研究の不足が指摘されており、賀茂真淵研究を手懸けていたわたくしに持掛けられた。進捗が滞っているわたくしへの鼓舞の意味もあった。

賀茂真淵と本居宣長との学問の接点や、関連研究のさらなる補填充実などが必要であろうという問題提起に、わたくしにとって今回の鈴屋学会発表の意味があった。研究の照準とすべき問題点である。

くしくも賀茂真淵を祀る縣居神社において新資料が入手されており、三浦寛宮司の御好意によって資料提供を得ることができた。本稿をなすに当って、その資料に関わって論じていくものである。

本稿にて、要点として、次の三点を挙げて論述しようとするものである。

一 本稿で紹介しようとする資料が新資料であること。

本居宣長から栗田土満宛の書簡である。

加えて、本居宣長の自筆書簡であることが判明し、真の資料として

賀茂真淵と本居宣長の学問

の価値が附加された。

二 賀茂真淵と本居宣長との学問関係について触れる。

『仮名書古事記』（賀茂真淵著）と『古事記伝』（本居宣長著）の在り様について、一例を挙げて考える。

国学が古典作品を学問として解明していく中で、文学作品として享受されてゆく契機を生誕させる画期性。

三 本居宣長の師への顕彰

本居宣長から長男本居春庭を中心として、本居家の賀茂真淵に対する並々ならぬ顕彰の意識について触れる。

遠州国学への連環を促がす。

上記よりの視点をもって国学研究のささやかな論考としたい。

一

本稿は江戸時代中期、本居宣長（享保十五年五月七日〜享和元年九月二十九日没、七十二歳）が弟子栗田土満（元文二年〜文化八年七月八日没、七十五歳）に宛てた新出の書簡を資料とする。末尾に「本居宣長」の署名がある。二百一十八年の時空を経て、未公開資料を紹介し、公刊し得ることは喜びである。

通常の本居宣長の字は周知のごとく、律義に、整然と柘目に楷書で分りやすく筆が運ばれる。平成十七年の春季「鈴屋学会」大会のある発表において、普通に本居宣長の字を一般に即した考え方を研究者が解説する場に遭遇した。それほどまでに、一般には本居宣長の字は画一化が強調される所があるというこ

とである。

本居宣長自身も読み易く丁寧に書くことを信条としていたようである。相手に誠実に伝えることを做いとし、結果として本居宣長が書いたものは数多く後世に伝承された。後世に自己の学問を伝えることを目的とし、本居宣長の子孫も継承していくことを意図してきた御蔭であるといえよう。

ところが、本稿で紹介しようとする当書簡は通行の柘目におさまる一画一画はつきりした楷書体の字体とは一味違っている。筆墨による字は異なった筆運びの妙味がある。料紙は普段使用の楮紙とは異なり、美しい紋様が刷られた和紙である。一筆をおろす時の緊張と高揚が伝わってくるようだ。この和紙に記された字はのびやかに美しい書体である。

当書簡巻末の署名は「本居宣長」と署名されている。一般に見られる本居宣長の字体すなわち柘目におさまる楷書とは一見、齟齬を感じさせる。「本居宣長」と記された署名があるだけに、当書簡は字体の点からどのように考えたらよいか、困惑させられた。先入観への拘泥から離れなければ、真実は明らかにし得ないのではないか。そのような印象を感じざるを得なかった。

本居宣長は資料を扱う際に、みだりに新資料であるということを戒めている『玉勝間』。本居宣長の言葉は文献博搜の学究ゆえにこそ重みを増す。特定するには慎重にと、言葉をかみしめながら取組むわけである。

当書簡の、「本居宣長」の署名の字体をどのように考えたらよいか。通常に見る本居宣長字体と差がある。ゆえに当資料はかえって、いささかの困惑を生じさせると同時に、研究の妙味と奥深さを味あわせてくれるものとなった。いかなる展開となるのか、魅惑的な稀な資料と向い合い、研究の楽しさを堪能させるものとなった。

当資料の来歴は不明ながら、縣居神社に納められたのは平成十六年十二月に入っている。本居宣長の師の賀茂真淵を祀った神社である。本居宣長の栗田土満宛ての書簡が奇縁にも両者の師である賀茂真淵祭祀の縣居神社に二百二十八年の歳月を経て納められた。不思議な巡り合せといえよう。

賀茂真淵は遠州浜松の地において生を享けた(元禄十年三月四日)明和六年十月三十日没、七十三歳)。江戸の地で国学者として活躍し、没後、江戸時代末期に縣居神社として奉祀されている(天保十年縣居翁霊社が建立、高林方朗(みちあきら)の発願により縣居神社の社号許可を得た)。現在、縣居神社の土

地が供出されて、同一敷地内に静岡県浜松市立賀茂真淵記念館が建立されている(昭和五十九年十一月開館)。当館では賀茂真淵を顕彰し、資料蒐集に尽力されている。賀茂真淵の号、縣居にちなむ名称の神社ならびに記念館であり、賀茂真淵の生を彷彿とさせる台地(遠江国敷智郡伊場村、現浜松市東伊場)の鎮守の森に存する。

賀茂真淵晩年の弟子であった栗田土満は、賀茂真淵の没後、本居宣長の弟子となる。ちなみに栗田土満は遠江国城飼郡平尾村平尾八幡宮祠官を父とする。賀茂真淵と同じ遠江の生まれであり神職の家系である。賀茂真淵と本居宣長という二大国学者の薫陶を授かった栗田土満は遠州国学の発展に寄与する存在となった。

本稿で取り挙げる紹介の当資料は本居宣長が栗田土満に宛てた書簡であり、新資料として世に出現したことになる。

本居宣長は栗田土満を弟子として遇し鍛えあげて行こうとする。遠州と松坂を結ぶ遠州国学のルートも重視される。今では遠州鉄道での移動が可能であるが、江戸時代、すでに遠州国学は文化サロンを形成し往来していたのである。賀茂真淵から栗田土満へ、さらに栗田土満は本居宣長の弟子として国学を学ぶ。国学者たちが点から線へと輪を広げているといえる。遠州地域の資料の整備も今後の課題であり、遠州国学の研究への着眼をも期待したい。

当資料に戻ろう。本居宣長の栗田土満宛て書簡は表装され掛物として桐箱に納められている。桐箱の蓋表に「本居大人書簡」「木枯森揚碑」と筆で直書されている。箱内には二軸の掛軸用の軸の溝があり、二掛軸が元来は存在したと想像し得る。現在は前者のみ現存しており、後者は欠本となっている。なお、「揚」の字は摺の異体字である。「木枯森揚碑」が出現すれば(連れ)の発見となり、一対が揃うことになる。

「本居大人書簡」の掛軸を繙くことにする。この掛軸一本に、二書簡が上段と下段の二段に分けて、表装されている。当二書簡ともに、本居宣長が栗田土満に宛てたものである。しかし、上段と下段の署名は本居宣長であるが、字体が上段は本居宣長のよく見かけられる四角い楷書の本居宣長であり、下段はのびやかな字体の「本居宣長」と記す署名である。同一人の署名とは判明し難いものが上下に表装されており、字体の変化に当初まどわされる一書簡であった。下段の書簡(未公刊)を記す。新資料である。

本月十七日之御状相達し

忝拝見仕候 漸甚暑ニ相成

申候處 愈御平安御座被成

奉賀候 此元拙生無恙罷在候

乍憚御遠念被下問敷候 去

年御答申上候神社位階之

事御心ニ叶申候由悦申候

『古事記傳』之義上卷之分

漸成功畢十六冊ニ相成申候

尚又追々中卷ニかゝり可申

奉存候 蓬萊氏は十四卷迄

写し被申候 当地御門弟中ニも

追々写し申し候へ共いまはか行

不申候 神代之事解したる

書かすゝ有之候へ共如仰

いづれもくゝたゞ漢意ニ溯レ而

空理をのみこちたく考え候故

皇朝の古意ニかなへるは一つも

無之候也 候辛ニ先師翁之

古学ニ仍而漢意ヲ清ク

洗濯而清々敷皇國之古意

を以て是を解ン事ヲ欲候也

一新年之御詠拝見仕候 甚憚

多候へ共任仰愚意不隠

加キ入返上申候 あなかしこゝ

失礼御免可被下候

一蓬萊への御書早速相届

申候 尚期後音早々

恐惶謹言

本居宣長

六月二十四日

賀茂真淵と本居宣長の学問

栗田民部様

当書簡はまことに美しい杉の目紋様の料紙に記されている。宣長の升目に嵌ったごくの通常の字体とは異なり、伸びやかに記された字である。

当書簡とは別に、既に同料紙が使用された書簡が存する。それは本居宣長記念館に蔵されている。新出の本稿と同様の、杉の目料紙に書かれた掛軸がある。本居宣長自筆と鑑定された掛軸である。

上記書簡において、本居宣長は『古事記伝』巻十四を荒木田経雅（蓬萊）に貸し書写させている。『古事記伝』の完成が克明に本居宣長によって記されているので参考となる（『本居宣長全集』第十七巻六十五頁）。本居宣長は著述した『古事記伝』について書簡の中で弟子に言い伝える。

書簡「安永六年十二月五日 栗田土満宛」において、

一、古事記傳、上卷一冊之分、十五六卷大氏出来寄り申し候、

とある。また、「安永八年六月二十九日 栗田土満宛（土満写）」書簡よりは以前であると、『古事記伝』を作成する段階の出来具合により確認できる。当資料は『古事記伝』十五巻成立以前に相当し、「安永七年六月二十四日 栗田民部宛 本居宣長書簡」と考えるのが妥当となる。

加えて、同日の宣長書簡の、「安永七年六月二十四日 荒木田経雅宛 本居宣長書簡」に次のようにある。

漸大暑ニ相成申候處、彌御平安御務被成候由、奉敬賀候、拙生無事罷在候、乍憚御安情可被下候

宣長の書簡は類型化した書き出しの天候の文章と簡潔な学問内容で綴られることが特徴といえる。誰が目にしても問題になる書簡ではない。公あるいは歴史をつねに考慮していた宣長の書簡の書き方であったと推察し得る。書簡にしたための文字も楷書で読み易いことを念頭に宣長は常に書いていたのではないかと思われるほどである。身口意の三悪業は自ずと避けたのである。学問に一点集中していた本居宣長の姿が彷彿とする。

書き出しの「大暑」も当日を偲ばせる類似の文章であった。まさしく同日に書き送った書簡が一本、新たに出現したことになる。安永七年六月二十四日付の本居宣長筆ということになる。

本居宣長記念館所蔵に同料紙を使用した本居宣長自筆の書簡があり、図録『21世紀の本居宣長』（朝日新聞社、平成十六年刊）に一部記載された。しかし、前半部分のみの記載で、後半部の料紙文様の箇所は図録に記載はない。第四章にて詳述する。

縣居神社が当資料を入手されたのは平成十六年十二月、京都の思文閣図録による入札によるとのことである。本居宣長、栗田土満の研究者であられる高倉一紀氏自身、情報は得られたものの一足違いで入手が叶わなかったとのことであった。国文学存亡の機にこそ、かたやの逸話に触れておきたい。当書簡がともあれ、本題の問題の資料である。

二

箱書「本居大人書簡」の二書簡の内の、上段の書簡の翻刻を示しておく。第一章で挙げた新資料の本居宣長書簡に加えて、縣居神社蔵の本居宣長書簡栗田民部宛（上段）を記す。

一筆致啓上候 漸暑氣に相成候節

愈御安全御座被成候哉 承度奉存候 愚老

無事罷在候 乍慮外御掛念被下間敷候

然者旧冬十二月當止月二月都合

三度之御状つきく相届忝致拜見候

いつもく殊の外多用故いままた御返事

も不申御無沙汰いたし候ほと御ゆるし可被下候

一 甲斐人萩原氏當春貴君へも御尋

被申候由此地へも見え申而ゆるく逢申

則入門被致候 如仰厚志之人に而歌も

よく出来申候 彼國地理之書述作

甚宜出来候物に御座候

一 駿府人野澤昌樹と申仁 右萩原氏へ被頼候由に而駿河國木枯森八幡社前へ

村長石上某石碑を建てられ右石碑へ

彫申候皇朝文 愚老へ認呉候様に石上氏

頼之由野澤氏より萩原氏へ之書状萩原氏

持参に而相頼まれ申候 夫故右之文相談申候

右野澤昌樹生は貴君御懇意被成候よし

かの文出来いたし候はは貴君へむけ

差し出し野澤氏へ御達し被下候様に致度

旨被申置候 右之通に而手附宜候由夫故

此文貴君へ御頼申候間野澤氏へ御達し

被下度奉願候 先は乍延引御返事且

右御頼かたく如此御座候 尚期後信 草々

恐惶謹言

宣長

五月八日

栗田民部様

上記は『歴史と國分學』第七卷第四號に翻刻の記載がある。天明七年五月八日栗田土満宛書簡である。本居宣長の通用の典型的な字体で書かれている自筆の書簡である。

冒頭の挨拶、ひとつ書きの二項目は、入門し、和歌もよく出来ることと、地理の著述を褒めている。当書物は、どのようなものであるか不明である。ひとつ書きの三項目の四行目に、本居宣長は「皇朝文」を依頼された旨を記している。本居宣長が皇朝の文の依頼を受けており、石碑という、歴史上長期に渡って残るものへの依頼は本居宣長の地位の確立を保証するものである。本居宣長への信頼を示唆する道標といえる。

本居宣長が駿河国から依頼を受けて仕事をしており、本居宣長の知名度を窺わせる。石碑の碑文の作成という後世に残る仕事を携わっていたことを知る。自己の仕事が版本で残すことにも専念した宣長の、世に知られていない仕事の

側面でもあった。野澤昌樹なる人物の特定は未定である。

三

箱書表記の搦(摺)本(縣居神社蔵)は、現在欠本である。駿河国の木枯森八幡社前碑詞より碑文を起す。

駿河國安倍郡木枯森八幡社前碑詞(題「木枯森碑」は横書、碑文は縦書である)

「木枯森碑」

「木枯森者、駿河國爾在事者、古今六帖之歌以斯良延、安倍郡爾在事母、風土記爾所見而、宇都母那志、抑此森者、彼六帖在乎始登為而、後撰集在歎木之歌、又定家之卿之、下露乃言之葉何登、自古、於世名高久所聞弓、今母佐陀迦爾、服部乃邑云邑之地爾在而、伊登神佐備在處尔奈母有祁琉、伊都伎祭神者斯母、掛麻久母可畏、廣幡之八旗大神、然婆加里奈流名所尔斯、鎮伊坐者、此母甚比佐々那流社尔、許曾波伊麻曾加流良米、此社、近伎年来、由々斯久荒坐斯乎、邑長那琉、石上長隣伊、勤志美有人尔弓、可畏久歎愁而、心乎起志、力乎致志弓、又美麗玖修造奉禮流、神伊都伎能淤牟加志佐波、更尔母不言、古徳雅情乎母、世乃人能心將有、聞喜備見喜而、森之木葉乃、年乃葉尔繁榮而、無絶世如事、萬代麻傳尔、不俚米夜不仰米夜、如此言者、天明乃七年云年之、五月乃月立、伊勢人本居宣長 武蔵左潤書并篆額」

こがらしのもりは、するがのくににあることは、ここむろくでふのうたもてしら
え、あべのこほりにあることも、ふどきにみえて、うつもなし、

賀茂真淵と本居宣長の学問

そもそもこのもりは、かのろくでふなるをはじめとして、ごせむしふなるなげきの

うた、またさだいへのまへつぎみの、したつゆのことはなにと、いにしへより、よにな

たかくきこえて、いまもさだかに、はとりのむらといふむらのところにありて、いとかむさびたるところになもありける、いつきまつるかみ

はしも、かけまくもかしこき、ひろはたのやはたのおほかみ、しかばかりなるなどころにし、しづまりますは、これもいとひささなるやしろに

こそはいまそかるらめ、このやしろ、ちかきとしごろ、ゆゆしくあれまししを、むらのおさなる、いそのかみのながちかい、いそしみある

ひとにて、

かしこくなげきうれひて、ころをおこし、ちからをいたして、またうるはしくつ

くりまつれる、かみいつきのおむかしさは、さらにもいはず、いにしへしぬふみやびごころをも、よのひとのころあらむ、ききよろこ

びみよろこびて、もりのこのはの、としのはにしみさかえて、たゆるよなきことのごとく、よろ

づよまで

に、しぬはざらめやあふがざらめや、かくいふは、てむみやうのななとせといふとし

の、さつきのつたち、いせびともとをりのりなが(以上、碑文の読みを附す)

この地が『古今六帖』『風土記』『後撰和歌集』など古来の歌集および藤原定家などによっても銘記されてきた点をあげ、「いにしへをしのぶみやびごころ(雅情)」を称えている。末尾に「天明七年五月一日、伊勢人本居宣長」の署名がある。遠州国学の形成に携った本居宣長の業績がここにも垣間見られる。現在では遠州鉄道があるが、文化ルートは既に江戸時代の国学者によって築かれていたことを知り得る。本居宣長の普段知り得ぬ仕事の確認である。

四

上記の縣居神社蔵の掛軸について、資料として詳述したい。掛軸の上段・下段ともに本居宣長から栗田民部へ宛てた書簡である。

下段の書簡の検討をおこなう。料紙は薄茶と水色の杉の目紋様の美しいものである。料紙の美しさと、書体ののびやかさがことに下段の方は目を引く。

上段は本居宣長の通常の楷書字体の署名であり、下段は本居宣長と署名されているものの、非常にのびやかな花押に見えるほど美しい。上段は本居宣長自筆と認定した。

問題は下段の「本居宣長」という署名である。本居宣長自筆とするには、あまりにものびやかで花押のごとき署名である。本居宣長の書簡の写しか、あるいは自筆かの認定が下し難い筆であった。

そこで、まず書簡が書かれた時期を特定することとした。

「安永六年十二月五日 栗田土満宛」書簡に、

一、古事記傳、上卷一冊之分、一五六卷大氏出来寄り申し候、

とある。そして、「安永八年六月二十九日栗田土満宛（土満写）」とある。『古事記傳』内容の出来具合からして考えると、「安永七年六月二十四日」と結論する。安永七年は一七七七年である。旧の六月下旬であるので、陽暦だと七月あるいは八月に入っている。当書簡冒頭の時局は「大暑」と記す。

疑問を解決する手掛かりが本居宣長記念館に納められている本居宣長の文献にあるのかと、藁にもすがる思いで記念館を訪れた。

当書簡が本居宣長自筆であると吉田悦之氏（本居宣長記念館主任研究員）は同じ料紙に記した本居宣長の掛軸を即刻持参下さり見せて下さった。本居宣長の書体は楷書の崩さない字体に加えて、本居宣長の心境が書体に反映している様々な書体を実感した。本居宣長記念館に蔵された、常態でない本居宣長の書体と料紙の書簡に、原本に触れることの重要性を再認識させられた。爽やかな感動に浸ることができた。

平成十六年刊行の『21世紀の本居宣長』展示図録に掲載した一書簡の前半部のみが記載されている。後半部は残念ながら記載されていない。この後半部に

は本居宣長が使用した料紙が使用されており、縣居神社蔵掛軸と同じ料紙が使用されているのである。

本居宣長から、一つは伊勢神宮神荒木田経雅に宛てた書簡であった。そして、他の一つが当資料の栗田土満に宛てた書簡である。それらは、本居宣長から二人に宛て同年同月日付で出されたことになる。本居宣長は、挨拶に次いで学問についてしたためている。その姿勢は本居宣長の多い書簡で一貫している。相手の身分に関らず、本居宣長は学問について詳述する姿勢が貫かれている。当料紙に記された縣居神社蔵の掛軸の字体も、本居宣長の高揚した気分が反映したのか、まことに稀に見る伸び伸びした華やかな書体で記されたのである。

（縣居神社蔵「本居宣長書簡」軸装、杉の目模様（地肌色、模様茶色・水色）
料紙 縦十六・一c m×五十九・五c m）

五

大野晋氏をはじめとして本居宣長研究者の中には、根本的には賀茂真淵に出会ってなくとも、本居宣長は偉業を成し遂げたといわれる学者もあった。本居宣長は若年の頃京都に游学の折、僧契沖の著述に出会い自己の学問を早く成し遂げた人であるとの評価も常々与えられてきた。本居宣長の『新古今和歌集』歌への愛着と、師賀茂真淵の『万葉集』推奨の齟齬などによって、師は必要なかったとの言説はしばしば、本居宣長の学問について囁かれるところである。確かに環境、能力、決定的著述との出会いが学問を完成させる場合がある。

本居宣長の生涯をかけた学問はいかに形成されたのであろうか。

本居宣長の自立した緻密な思考に加えて、人との邂逅によって成し遂げ得た学問も、本居宣長学の一面ではなからうか。師賀茂真淵と本居宣長との師弟関係によって確立した、決定的な学問のあり方も見なければならぬ。生涯、命をかけた両領袖は学問を結実させるべく尽力したのである。

賀茂真淵の『冠辞考』に触発された本居宣長が求めた松坂の一夜の賀茂真淵との対面は宝暦五年であった。賀茂真淵は三十歳以上も年齢の離れた本居宣長の鋭い頭脳を一面において見抜いたと考えられる。賀茂真淵と本居宣長は運命的な出会いをして後、『万葉集』を始めとして学問の質疑応答を書簡で五年

間も継続している。賀茂真淵は本居宣長の指導を通じて、師の立場から同業の研究者として、深く刺激を受けつつ本居宣長に敬愛の心を抱くほど変容していったとわたくしは考えている。ついに、本居宣長は『古事記』研究を三十五年間の歳月をかけて『古事記伝』として完成させたのである。

江戸時代に入っても、漢文の『古事記』はむづかしく読むことが出来なかった書物である。賀茂真淵は『古事記』の会説を八回も行い、『仮名書古事記』を著した。漢字交じり平仮名文で『古事記』を書き上げた。賀茂真淵は漢字を非常に少なく、大半は平仮名の表記を使って記したのである。漢文から平仮名ですらすらと読めるように記したという点、画期的なことであった。文学作品としても享受される種を国学が蒔いたことは評価されるべきだとわたくしは考えている。

しかし、賀茂真淵は頻りに「はかゆかぬ研究」だと記している。後を託す人物として、長年専門の学者を多く輩出してきた賀茂真淵は本居宣長にその任と白羽の矢を立てたのである。ことに明和三、四年頃から没する七十三歳まで、若い本居宣長に祈るような気持であるとを託す旨の書簡をやりとりする。また、四大弟子の一人の加藤宇万伎に書簡を送り本居宣長と親交をもつべくはかったりもする。

『仮名書古事記』の八回の会説を行って、宝暦八年につくり、そして『劈頭古事記』を賀茂真淵は著したのである。『古事記』研究への深化は窺えるものの、賀茂真淵自身としては決して満足するものとはいえなかったであろう。さもなければ、弟子に学問の新たな展開を要求することはしなかったであろうと考えられる。

賀茂真淵は中年から老年に至り晩学であると自己が認識するほど学問に心を入れる。その様子は次の書簡からも窺える。

真淵書簡栗田求馬宛（明和四年十月二十八日）

よりて古事記・万葉其の外、宣命・祝詞をよく心得、自己に古哥を詠、古文を書いて後、其古言を知て紀をも訓へしとおもふ故に、真淵四十年來此事に心を入、漸六句以後意を得たり、然れば日本紀は文字は捨て、傍訓をこそ尊とまめ（割注 今訓の中、大半は除て古訓をいふ）、是を抹去は天下

賀茂真淵と本居宣長の学問

の過失や、かゝれば此人取かたし、向來は文通有とも有用こと少なかるへし、何とそ今一度拙者存命の間、御下向あれかし、此度は神代紀の訓を始めとして、其上我等かうたを談候はん也、猶後來可得御意如此のみ也、

賀茂真淵は「六十歳以後、意を得たり」と言いつつ、存命中逡巡しているのである。賀茂真淵の書を見るに、自筆中、目も患らい字の行が右から左へ斜めに歪むこともある。しかし、ひたすら学問の完成を願う熱意の人である。栗田求馬すなわち栗田土麿へ、古学の中でも『日本書紀』の研究を奨励しようとする書簡である。弟子に課題を投げ掛けているのである。

ところで、『古事記』研究の版下について触れておく。栗田土満の国学研究への関わりを本居宣長との関連で挙げるならば、『古事記伝』の版下書きにおいて大役を仰せつかることになる。本居宣長は『古事記』の本文を書き、『古事記伝』の部分は長男の春庭に指名した。巻十八、十九、二十、三、四、五、六、七、八、九、一、二、十、十一、十二、十三、十四を本居春庭がやったが、失明という悲事に遭遇する。そこで、本居宣長が巻十五、十六、十七の版下を自書し、巻二十一を門人の栗田土満に板下を書かせたのである。

巻二十五から二十九を次女的美濃にやらせている。巻三十から三十四を門人の植松有信、巻二十二から二十四も同様か、巻三十五から四十四を本居春庭門の丹羽勘（つとむ）が記した。賀茂真淵の『古事記』研究への希求は、本居宣長が三十五年の歳月をかけて継承し『古事記伝』として完成させたのである。

賀茂真淵自筆による鈴木梁満に宛てた最晩年の書簡には次のごとく記されている。

一、神代巻の訓にいとわろき事多し、

（略）

是はかの信幸又土万呂かたに有をかりて改められよ、そも又古書なれば塵を拂ふが如く、見ることにわろき事も出来ぬれば、いまた必とはいひかたかれど、凡は古へにかなふへし、是をもて紀をもよみ給へ、紀にもおのれか訓あれと、いまだしき事有ば、今しばし過ずはかしまりかたし、此訓の事、おのれ四十年はかりの願にて改めぬれと、猶清う定めかぬめり、文字も誤り多く、文もみたれて、前後せる所も落し所も少なからず、然るを

後世の學者流は、本文をはそらに見やりて、空理を作りて強てその所々に加ふる故、よく論ふ時は一つとして古へにかなへるはなし、多は儒佛の意也、いかでわが朝の人代の古へをつくさずして、神代を伺ふ事を得んや、よりて己れは四十年願ひて人代を凡につくして神代に及へり、ことし七十三の齡にて身おとろへ、心しれ行ぬれば、今はせんすべなけれど、命の限りとして朝夕つとめ侍るのみ、

上記、明和六年三月六日書簡にも晩年の鈴木梁満、栗田土満など弟子たちと賀茂真淵学の在りようが彷彿と浮上して見える。賀茂真淵は最晩年の最後となつた書簡に学問へのこだわりを弟子に指導しつつ、八ヶ月後同年十月三十日に没するのである。死期の迫る、七十三歳の身で、命ある限り具体的な学問の方法を詳述し送付し続けていたのである。

栗田土満は七十五歳で世を去る二年前の最晩年に『神代紀章牙(あしかび)』を完成させている。遠江の弟子内山真龍は『日本紀類聚解』を著述し、弟子たちに学問の成果は現れつつあったのである。賀茂真淵と本居宣長の、両者の弟子たちの研究については今後の課題として在る。

附加するならば、賀茂真淵は元来の『古事記』の漢文表記から明和五年『仮名書古事記』として読めるようにした。文学として面白く読むことを主眼にした。古典文学への誘いを行った。古学で扱った学問を、文学すなわち古い日本の神話としての読みを可能にした。会読により推敲、練っていったものである。賀茂真淵は「しろをさぎ」と読んだ。翌明和六年『語意考』に記す。流布本(明和六年二月)に「平佐藝と宇佐藝 万葉」、清書本(明和六年二月)には「平佐藝と宇佐藝」とあり、両用の思考が窺える。

本居宣長は『古事記伝』においては、従前の「白うさぎ」の「白」の字は間違いで「素」とし、意味は「裸の義」で、漢字に傍仮名を振り「アカハダ」とした。賀茂真淵の「しろをさぎ」「うさぎ」から、本居宣長の「素うさぎ」へ国学の思考を知る一例である。

賀茂真淵が生涯かけたへいにしへ学び、すなわち日本の古典に関する学問の真髄を探究しようとした。国学の研究が対象とする古典文学作品の中で、自由に読み解かれなかった本が読書の対象として楽しめる本になって行ったことも、ひとつには国学なる学問がもたらした御蔭によってである。

六

本居宣長が自己の学問を形成していく上で師賀茂真淵に対してどのように考えていたのであろうか。なみなみならない師賀茂真淵への顕彰が窺えるのである。

本居宣長の「みたまのふゆ」は自身の文学上、学問上の意識を深く顕在化したものとして注目したいものである。「恩頼」はオンラインと音読みされる場合もある。次に簡略図を示す。

西山公
屈景山
契冲
父主念仏者ノマメ心
御子守ノ神
母刀自遠キ慮リ
真淵
紫式部
定家卿
頓阿
孔子
ソライ
タサイ
東カイ
垂加

本居宣長の絶対意識はみずからを誕生せしめた父母を最上部中心に据えていることに窺える。父母を超える人物はいかなる歴史上の人物も存在せず、かならずその下位に位置しているのである。そして、注目すべきは本居宣長にとつて、父母を除き、生きた人間として交渉があったのは学者あるいは文学者、歌人として、唯一の人物は賀茂真淵であった。他は歴史上の人物を掲げ、本居宣長がいかに歴史文化を重視していたかを知る。中国、我国の錚々たる人物より

は父母に隣接して賀茂真淵は重視されているのである。

本居宣長が真に何を目指し、さらには賀茂真淵の学問がどのように享受されていったのであるか、表に出にくい点は今後の課題として深めて考えていきたいところである。

本居宣長は賀茂真淵十三回忌に長歌を制作した。冒頭に、

わが学びの親でおられた縣居大人は、此高き尊きいにしへ学びのわざをし始め、おこし給ひて、天の下に万代にほどこしたまひ残し給ふ、

と述べ「いにしへ学び」開学を顕彰している。さらには、賀茂真淵を「ぎよく(玉)」に喩え

大人を玉ならばあはひ白玉 真白玉

と称え、

白玉の光はやけにしその光はや

と称える。金銀、瑠璃、碑礫、碼礪、珊瑚、琥珀に連なる真珠のごとき光の意であったか。本居宣長は賀茂真淵を「真白玉」と、国学の巨頭として顕彰したのである。

本居宣長の長男の本居春庭も次の和歌三首を詠んでいる。

本居春庭自筆懷紙「賀茂大人をしのひてよめる」(賀茂真淵記念館所蔵)

春庭

十年あまりふりし時雨の

音にのみきゝてもそでの

ぬるゝけふかな

かれめやはのこすかたみの

ことの葉はいく千代霜の

置かさぬとも

いかにしてむかしのみちを
たつねまし君かしをりの
なからましかは

賀茂真淵の残した「ことの葉」、「むかしの道」すなわち古道は賀茂真淵のいしずえとなった枝折りがあればこそ辿って尋ね得ると称えた的確な歌である。敬虔な学者本居一門の、賀茂真淵への顕彰が窺えるのである。

かく言わしめた賀茂真淵の最晩年で締括ることとする。

此訓の事、おのれ四十年ばかりの願にて改めぬれど、

と、三十代に学問を始めてから、『古事記』の訓を定め、「古へにかなふ」べく尽し、四十年間熟を入れてきた御陰で『古事記』の神代から人代に及ぶようになった。賀茂真淵は没する直前の七十三歳におよび、身が衰えて致し方ない。しかしながら、尽力して勤めるつもりであるとなおもいう。

賀茂真淵は誠心誠意、学に賭け、弟子本居宣長を中心に次の世代へ、わが学びを手渡していったのである。

今後、資料に即きつつ学問を探索して行かなければならないと考えている。両領袖ともに、放身捨命、行のごとき思念であったと推察する。

附記

第二十二回鈴屋学会大会にて、「賀茂真淵と本居宣長」と題した口頭発表(平成十七年四月十七日(日))を原稿としたものである。

縣居神社宮司三浦寛、金沢学園大学教授山下久夫、皇學館大學教授高倉一紀、本居宣長記念館主任研究員吉田悦之、の各氏には貴重な資料提供ならびに御教を賜わり、深謝いたしております。なお、私事ながら金蘭会学園の百周年記念に拙稿を投稿し得たことを喜びとするものである。